

秋田県・私立秋田修英高校

学力向上・多様な希望進路の実現

全教師が連携して

生徒一人ひとりと向き合い、

意欲的な学習集団を形成

変革のステップ

背景と課題

- 生徒の学力向上とともに、スポーツコース設置以降に多様化した希望進路への対応が課題だった

実践内容

- **「修英タイム」の設定** 全コース・全学年で毎日25分間の「修英タイム」を設定し、月～木曜日には学び直し、金曜日には1週間の振り返りを実施。また、生徒が「やればできる」と実感できるように、全国規模のアセスメントで学び直しの成果を定期的に測定
- **学び直しに特化した学校設定科目の開設** 進学文化コースの1年次に、学び直しのための学校設定科目「基礎国語」「基礎社会」「基礎数学」「基礎英語」をそれぞれ週1時間開設。「修英タイム」で芽生えた学習意欲をさらに高めることを目指した
- **少人数制の進路指導の推進** 2年次の3月以降、希望進路が類似している生徒5～6人を1つのグループとし、各グループを教師が1人ずつチューターとして担当し、進路指導に力を入れた

成果と展望

- 粘り強く学習する生徒が目立つようになった
- 高い希望進路を設定し、挑戦する生徒が増加

PROFILE



建学の精神・校訓に「勤勉・誠実・奉仕」を掲げ、次代の社会を担う有為な人材の育成を目指している。進学文化コースとスポーツコースから成り、両コースとも2年次から教養・ビジネス・福祉の3系列に分かれる。

設立	1959（昭和34）年
形態	全日制・通信制／総合学科／共学
生徒数	1学年約40人

2018年度進路実績（現役のみ） 私立大は、八戸工業大、東北工業大、東日本国際大、作新学院大、平成国際大に延べ6人が合格。短大、専門学校進学6人。就職23人。

住所	〒014-0047 秋田県大仙市大曲須和町1-1-30
電話	0187-63-2622
Web site	http://www.akitashuei.net

スローガン「修英メソッド」の下、 全校体制で学力向上を推進

秋田県・私立秋田修英高校は、全校生徒数約150人（全日制約120人、通信制約30人）の小規模校だ。生徒は明るく素直であり、生活態度も落ち着いているが、学力に課題があった。また、スポーツコースを設置してからは、生徒の希望進路がより多様化する傾向にあり、生徒一人ひとりが目標に積極的に挑戦できるように、支援を強化することが最重要課題だったという。そこで、2008年度、学力向上と多様な希望進路の実現を柱とする指導改善を全校体制で推進することにした。現在は、「愛情ある、諦めない、同じ方向を向いた指導と、生徒のよ

*1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲の学び直し専用プリント教材。
*2 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

さを認めてさらに伸ばすための手厚くきめ細やかな指導」の実現を目指すというスローガン「修英メソッド」を打ち出し、教育活動の根本指針としている。教務主任の石田奈津子先生は、次のように語る。

「基礎学力は、将来どのような道を歩むにしても必要になります。しっかりと定着させて、社会や上級学校に送り出したいと考えました。また、教師が生徒一人ひとりと密接にかかわりやすいという小規模校の強みを生かせば、生徒の成功体験を充実させることができます。学校が一丸となり、そうした目標の達成を図っています」



秋田県・私立秋田修英高校
石田奈津子 いしだ・なつこ
教職歴29年。同校に赴任して25年目。教務主任。「先入観なく生徒を見つめ、3年間をかけて成長を手助けできる教師でありたい」

秋田県・私立秋田修英高校
高安美樹子 たかやす・みきこ
教職歴24年。同校に赴任して11年目。進路指導主事。2学年主任。「人生の先輩者として、また、ともに歩む者として、生徒を支えたい」

秋田県・私立秋田修英高校
大日向力 おおひなた・ちから
教職歴23年。同校に赴任して24年目。教務部情報部主任。「1人でも多くの生徒に数学の魅力を支えらるる教師でありたい」

秋田県・私立秋田修英高校
畑山あゆみ はたやま・あゆみ
教職歴7年。同校に赴任して8年目。通信制課程主任。教務部。「常に『よりよきしょう』と心がけ、生徒の進歩を見守りたい」

習熟度別・少人数制の学び直しで、生徒の課題にきめ細かく対応

指導改善の中軸を担う取り組みが、定期考査期間や行事などがある日を除いた毎日、全コース・全学年で設定されている13時25分～50分の「修英タイム」だ。

月～木曜日には、「修英チャレンジ」として、小・中学校段階の国語・数学・英語の学び直しに取り組む。生徒一人ひとりの課題に丁寧に応じられるよう、習熟度別の少人数制クラスを編成。校長を除く全教師が分担し、各クラスを複数の教師が指導している。以前は学校独自の教材「修英検定」を用いていたが、多様な分野から幅広く出題したり、生徒間の学力差に対応して作問したりするのが難しく、生徒の実態を反映した問題にしきれいなくなったという。そこで、16年度からは、「マナトレ」(*1)を活用している。さらに、マナトレで学習した成果を客観的な指標で測れるよう、「基礎力診断テスト」(*2)を定期的に実施することにした。そのねらいを、進路指導主事^{たか}で2学年主任の高安美樹子先生はこう話す。

「生徒には、堂々と学び直しをしてほしいと思っています。他校でも活用されているマナトレであれば、生徒は『自分たちだけが取り組んでいる特別な問題』といった意識を持たず、より前向きな気持ちになれると考えました。また、基礎力診断テストでは、生徒は

マナトレを頑張れば頑張るほど、GTZ(*3)が上がる実感できます。そうして生徒に『やればできる』と実感させ、学習意欲を伸ばしたいという思いもありました」

マナトレのプリントは、1日1枚以上取り組むことが目安だが、生徒の実態に応じた柔軟な指導を重視するため、学年団では生徒の学習状況の把握に力を入れ、課題がある生徒にはこまめに声をかけている。ある学年で効率的な進捗管理のアイデアが生まれると、他学年にも浸透していくという。例えば、17年度の2年次では、表計算ソフトで作成した「学習状況チェックシート」を用いたが(図1)、それは、18年度には全学年で活用されている。同シートを発案

図1 「修英チャレンジ」における「学習状況チェックシート」

H30 修英チャレンジ 3年生 学習状況チェックシート

①標準= 2018/11/7 ②挑戦= (上段=10～7級まとめ)

組番	氏名	コース	級	STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4	STEP 5	STEP 6	STEP 7
		①標準	(10-7)-6	4/26	4/26	4/27	4/27	4/27	4/28	4/28
			5-4	8/27	10/25	10/25	10/25			
		①標準	(10-7)-6	4/26	4/27	4/27	4/27	5/7	5/7	5/28
			5-4	8/27	8/27	9/5	9/5	10/25	10/25	10/27
		①標準	(10-7)-6	4/26	4/26	4/27	4/27	4/27	5/28	5/28
			5-4	8/27						
		①標準	(10-7)-6	4/26	4/27	5/28	5/28	5/28	6/4	6/4
			5-4							

マナトレの進捗状況を一覧化することで、課題がある生徒をいち早く見つけ、声かけができるようにした。18年度からは全学年で活用されている。

*学校資料を基に編集部が一部改編。

*3 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

した情報部主任の大日向力先生は、こう語る。

「17年度、『学習状況チェックシート』を試験的に活用したところ、生徒の頑張りが課題をより把握しやすくなり、生徒の実態にこまめに応じられました。そこで、18年度は、活用の成果を先生方に伝え、表計算ソフトで作成したデータを各学年に渡しました。教師一人ひとりの工夫を学校全体で共有し、生徒の実態把握を深めていきたいと考えています」

マナトレの各級のプリントを解き終えた生徒には昇級テストを行い、合格者の氏名を生徒用昇降口に掲示して表彰している。掲示が更新されると、それを見に来る生徒が多いという。通信制課程主任の畑山あゆみ先生は、こう話す。

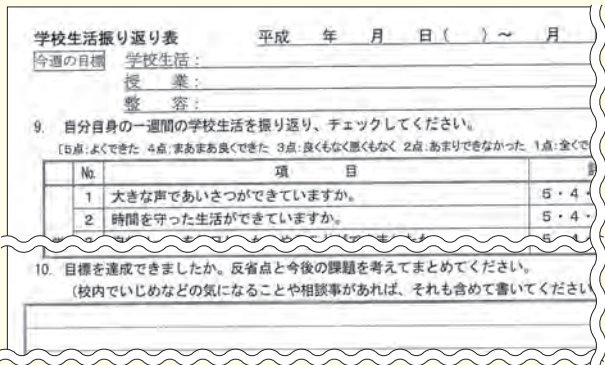
「昇級テストに合格した生徒は、掲示された自分の氏名を見ればうれしく、『もつと頑張ろう』と思うでしょう。一方、合格できなかった生徒も、クラスメートや上級生・下級生の頑張りを知り、刺激を受けるようです」

文章による振り返りを重視し、生徒の気づきを促す指導

金曜日の「修英タイム」では、「学校生活振り返り表」を活用し、1週間の振り返りを行う(図2)。「学校生活」「授業」「整容」の3つの観点から、1週間の反省点や今後の課題などを文章にまとめ、次週の目標を設定する。

「自分で立てた目標であれば、『頑張つて達成しよう』という意欲が生まれます。すぐに

図2 「学校生活振り返り表」



「学校生活」「授業」「整容」の3つの観点について、5段階で自己評価したり、反省点と今後の課題を記述したりする欄、また、担任のコメント欄がある。

*学校資料を基に編集部が一部改編。

は達成できなくても、こまめに自分の成果と課題を確認すれば、着実な前進につながります。そうした日頃の積み重ねの大切さを伝えたいと考えました。また、文章による振り返りを行い、生徒の内省をさらに深めたいという思いもありました(高安先生)

「書く」取り組みには、学年団が独自に行うものもある。例えば、18年度の2学年では、振り返りの場を増やすため、行事ごとに作文を書かせることにした。文章にまとめる中で、自分の頑張りが課題に改めて目を向けたり、クラスメートと協働する意義に気づいたりする生徒が多いという。筆が進まない生徒には、書きやすくなるよう、担任が「君はあの場面でよいこと

を言ったよね」などと声をかける。ほかにも、18年度の2・3学年では、毎日の朝学習の時間に新聞記事を読ませ、感想を書かせている。

「書く」指導で最も意識しているのは、生徒の『書きたい』という意欲の醸成です。そこで、『うまく書く』としなくてもよいから、たくさん書こう』と繰り返し呼びかけています。そうして自分の考えを文章で述べる習慣が定着していけば、大学の志望理由書や企業のエントリーシートの作成にも役立ちます(大日向先生)

「自学ノート」を継続し、学習の「量」から「質」への転換を図る

学力向上対策としては、学び直し「修英チャレンジ」のほかに、2つの柱がある。

1つは、進学文化コースの1年次の学校設定科目「基礎国語」「基礎社会」「基礎数学」「基礎英語」だ。いずれの科目も中学校段階の学習内容を扱い、週1時間、教科担当がT1、他教科の教師がT2となるチーム・ティーチングを行う。

「マナトレを活用した学び直しにより、生徒は学習に自信を持ち、前向きに取り組むようになっていきます。そうした意欲をさらに伸ばせるよう、学び直しのための科目を設置しました(石田先生)

もう1つは、自主学習を充実させることを目指し、全コース・全学年で行っている「自学ノ

